

わたしは福音を恥としない

使徒パウロは「わたしは福音を恥じとしない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である」と言明する(1:16)。なぜパウロは「わたしは福音を誇りとする」と言わないで「わたしは福音を恥としない」と言ったのか。

或る人はこれを「誇りとする」ということの単なる誇張法と解するが、しかしそうではない。パウロが「わたしは福音を恥としない」と言ったとき、彼は文字通り「恥としない」と言ったのであって、それは、初代教会の人たちがいかに福音が恥とされるような状況の中に生きていたか、そして、その中で、彼らがいかに嘲笑と迫害にさらされながら信仰に生き、宣教に励んでいたかをよく表しているのである。

そのことを理解するためには、当時の世界において十字架による死刑が最もいまわしい刑罰であり、またその死は屈辱の死であったということを出す必要がある。パウロがコリントの信徒への手紙一で書いているように(1:18～25)、キリストの福音が伝えられるところどこでも、「十字架」のメッセージは人々によって愚かとされ、恥ずべきものとされた。

十字架の上にさらしものにされ、犯罪者と同様に処刑されたイエスを、神がこの世につかわされたメシア(キリスト)であると宣言することは、律法と敬虔を誇ったユダヤ人にはつまずきであり、また、知恵と教養を誇ったギリシャ人には愚かであり、恥ずべきこと以外の何ものでもなかった。

こうして、使徒パウロをはじめ初代のキリスト者たちは、神聖冒涇者としてユダヤ人からは迫害され、ギリシャ人からは愚かとして軽蔑され、嘲笑された。そういう恥辱と苦難の中で福音を伝え、「イエスは主であり救い主である」と告白し続けることは、信仰の戦いを意味し、実に勇気のいる行為であったのである。

その状況は今日においても変わりはない。キリストの十字架と復活の福音は依然として物笑いにされ、軽蔑され、嘲笑されている。そういう状況の中に今日の私たちも生きている。そして、時には、この信仰のゆえにしばしば困難に直面して恐れ、或いは、予想される信仰の困難の故に、キリスト者であることを隠そうとしたり、或いは、人から変人と思われ、笑われ、卑しめられることを恐れて、この世と調子を合わせて生きようとする。こうして私たちは、私たちのために十字架に命を捨てて下さった贖い主キリストを否み恥じることをしてしまうのである。

パウロは「わたしは福音を恥じとしない」と言った。この言葉の中に、使徒パウロの救い主キリストに対する深い感謝と燃えるような愛が表されている。福音とは、どうしようもない罪人である私たちを神が決して恥じることなく受け入れて下さっているという出来事ではないか。この、どうしようもない罪人を恥じることなく神の御子が十字架にかかって死んで下さった。この神の御子キリストをわたしたちはどうして恥じることができようか!

私たちもまた、福音を恥じとしてはいけないのである。なぜなら、それは「ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に、救いを得させる神の力である」からである(1:16)。

